



## 光と闇

榎本 栄次

クリスマスを「闇に光」として譬えられることが多い。パウロはこれを「闇から光」と表現する(コリントⅡ4:6)。「闇に光」ではなく、「闇から光が輝き出でよ」と言う。わたしたちはできることなら闇を避け、光にのみ希望をしようとす。闇は悪であり、光こそ善であると理解する。しかし実際にはそうはうまくいかない。そこで極力闇を隠そうとし、光ばかりを見せようとする。そうするとより深い闇に入るのではなからうか。暗い闇の中から光が輝き出る。

フランスにいる娘から便りを受けた。一昨年、フランス人の夫を亡くし、南部の田舎で孫たち二人と3人暮らしをしている。孫たちの友達に来てこんな話をしたという。学校から課外学習での話である。

少し離れたエクス=アン=プロヴァンスという町に、第2次世界大戦中のユダヤ人収容所の施設を見学した。当時のフランス政府は、ナチス・ドイツの支配下にあった。ユダヤ人迫害に怯えるユダヤ人たちに「あなた方を守るから、証明書を持って集まるように」というお触れ出してこの施設にユダヤ人を収容した。しかしこれは嘘だった。だまして集めた彼らをそこから、アウシュビッツに送り込んだのである。ほとんど帰ってこなかったという。フランスの恥部である

フランス政府はその施設を残している。自分たちの犯した罪を忘れないように。しかもそれを小学生や中学生に見学させているというのだ。戦争中の話を聞き、実物を見せられて、ある子どもは目を閉じ、耳を塞ぎそこから逃げ出したり、嘔吐する子もいたそうだ。そんな子どもたちに先生は「辛いけど、しっかり見ておくのよ。あなたたちの優しいおじいちゃんやおばあちゃんたちがしたことだから」と。戦争はいけないこと、人を変えてしまう。悲惨さだけではなく、加害者としての残酷さの事実を見せるらしい。

フランスと言うと、「レジスタンスの国」というイメージを持っていたが、その国にも暗部があった。先日亡くなった元大統領のジャック・

シラク氏は、このことを明らかにした初めてのフランス大統領であったという。第2次世界大戦中の1942年7月16日、ナチス・ドイツの占領下にあったフランス政府は、パリ地域のユダヤ人約1万人を一斉に逮捕した。この作戦を含め国内各地で身柄拘束され、ナチスの強制収容所に送り込まれたのは8万人近くになるという。娘の話はこのことなのだろう。

シラク大統領は言う「啓蒙思想の国、人権の国、難民者や亡命者をかくまう国であるはずのフランスはこの日、とりかえしのつかないことをしてしまいました。自らの言に反し、守るべき人たちを処刑人に引き渡したのです。・・・わたしたちはユダヤ人に対して絶対に取り消すことのできない負債を抱えています」(ユダヤ人の犠牲を悼む式典での演説)。

これに習って、1997年、仏カトリック教会が大統領に続いた。戦時中、聖職者たちが「沈黙によって、死の歯車を回転させるままにしていた」ことをユダヤ人に謝罪した(10月13日、朝日新聞「日曜に思う」から)。

このように考えると、国の豊かさ強さが見えてくる。罪を認めることや謝ること反省などは本当に強い者ができることではなからうか。最近、日本の弱さ、浅さ、限界を感じる。

国の強さ、豊かさ、正しさ、明るさとは何だろうか。日韓関係が解決の見えない泥沼に入っているように思える。徴用工のことや従軍慰安婦のことなどに触れたくない、認めたら負け、と言うことだろう。「絶対に取り消すことのできない負債を抱えています」という自覚があるだろうか。それとも絶対に「闇」を認めたくないのだろうか。

国際社会の「勝者」となるためには、誰にも負けない武力と経済力をつけねばならないのだろう。明治以来の富国強兵のうたい文句は消えそうにない。ますます声高になっている。そこには「光」ばかりが評価される社会がある。闇は覆われて出る幕がない。

そうだとすると闇は深刻である。自分たちが光になるためには、闇に入る覚悟がいる。

## ✧ なんどきですか ✧

・いじめが教師の間にまで来た。成績、効率、生産性、管理、競争、自己責任がここまで来たか。もう少しゆっくりしたいと思っても、そんなこと言ってもらえないのだろう。

・ここら辺で仲良しになろう。強い者の機嫌を取るのを止めにして、弱い者同士で話し合おうじゃないか。  
(by E.E.)

## 投稿 京都俳句きらら会他

- |                   |     |
|-------------------|-----|
| ・星空の奥に星あり秋深む      | 周豊  |
| ・木漏れ日を目を閉じ浴ぶる秋蛙   | 公女  |
| ・里帰り記憶たどりてキノコ取り   | 茶香  |
| ・秋の気を震わせ遠く鶯の声     | 星児  |
| ・陽は柔くしぶきヒヤリと秋の海   | 海楽  |
| ・嵐去り雄姿際立つ愛宕山      | 枯骨  |
| ・収穫を終えし家路に夕日さす    | 虚舟  |
| ・この和尚テノール歌手か秋高し   | 岳   |
| ・台風にあおられ燃えるにわかファン | 小次郎 |

## ◇おさそい◇

★ 11月23日(土) 9時~16時(受付15時半)

もみじまつり(関西セミナーハウス共催)

★ 11月30日(土)~12月1日(日)

「開発教育セミナー」第5回

在日コリアンの歴史から学び、未来を考える  
<フィールドワーク 八瀬・岩倉エリア>

講師:水野直樹(元京都大学教授・同志社大学非常勤講師)

30日12:50 叡山電車「出町柳」駅改札前 集合

31日12:00 終了予定

♡ありがとうございました♡

関西セミナーハウス活動センターへの  
賛助・寄付金

2019.9.1-10.31 順不同・敬称略

手銭 秀夫、濱田 真奈美、南 和子、關岡 一成、梅山 猛、中上 和子、田沼 大典、吉中 直子、匿名氏、山本 知恵、金山 顕子、坂本 登、中島 健二、笹部 一正、最上 光宏、山崎 和明、島田 宗洋、八杉 恵、岡安 茂祐、荒井 加代子、村上 みか、金山 顕子、奈倉 道隆、西川 淑子、柳原 清美、シュペネマン・クラウス、日本基督教団西が丘教会、田中 義信、比嘉 美智子、八田 尚嘉、日本基督教団室町教会、井尻 勤、川北 かおり、中村 信博、ひいらぎ税理士法人。

📁クリスマス献金にご協力お願いします☆

## 四季だより ~森の匂い~

関西セミナーハウス庭園担当 榎 廣光

暦のうえではもう立冬である。だが辺りの気配はまだまだ晩秋である。関西セミナーハウスの庭の片隅の日陰で石蓀(ツワブキ)の花が晩秋の名残に黄色の濡色を数株見せてくれている。半月もすれば紅葉の時季。一雨ごとに冷え込みとともに、その気配が深まってくる。

お泊まりのお客様だろう早朝の散策、ひとりの中年男性がひとり言のように「空気の匂い! 森の匂いや!」とつぶやいた。いつもは気にしないのであるが、そう言われてみれば、森の匂い、木の匂いがするのかもしれない。いつもは街中にいて、車の排気ガスの臭いや生活臭に慣らされている。異なる生活環境から汚れていない自然環境の中に入り込むと、そういう匂いや気配を五感で感じとることができるのだろう。

比叡の裾野は、緑豊かな森で四季折々、人の心を癒やしてくれるのである。また多くの野生の生き物たちを育み、彼らにとってもゆりかごである。

日本庭園やガーデニングは、人が工夫を凝らした造形美で、いずれも美しく心を癒やしてくれる。更に日本庭園には、日本文化の伝統的美感覚として借景という造園技法がある。山などの景色を庭の一部であるかのように見せるのである。関西セミナーハウスの庭園はまさしく比叡の裾野の借景美とともにあると言える。「森の匂い」とともに小鳥のさえずりや風のささやきなど自然のまま、あるがままの借景が癒しという至福のひとつときへいざなってくれるのではないだろうか。

